公開版

特定希少野生動植物ヒメタイコウチ

保護管理事業計画

平成３１年３月

奈良県

目次

Ⅰ　ヒメタイコウチの生息地の現状と課題
Ⅱ　ヒメタイコウチの生息環境
Ⅲ　ヒメタイコウチの保護管理計画の基本方針
Ⅳ　事業の目標
Ⅴ　事業の区域
Ⅵ　事業の内容
　１．生息地の巡視
　２．生息地の保全
　３．生息域外保全の維持
　４．協働・啓発活動
Ⅶ　参考文献

Ⅰ　ヒメタイコウチの生息地の現状と課題

ヒメタイコウチ *Nepa hoffmanni* は、昆虫綱カメムシ目タイコウチ科に属する湿地性の昆虫で、基産地は中国、日本では 1933 年に兵庫県西宮市で初めて確認された。体長は 20㎜前後で背面は黒褐色で光沢が鈍く、やや扁平な体型をしている。前肢はカマ状に変形し、獲物を捕獲するのに適した形態となっている。成虫・幼虫とも肉食性で、湿地に生息する小動物・小昆虫を捕食する。日本での分布は局所的で、岐阜県、静岡県、愛知県、三重県、奈良県、和歌山県、兵庫県、香川県の８県で記録があるが、近畿地方では滋賀県や京都府、大阪府などからの記録はない。奈良県での分布は西部のみに限られている。偏った分布状況の要因はよくわかっていないが、ヒメタイコウチが飛べないことと関係があるとされ、また、湧水と関わる地史との関連についても言及されるが、未だその生態については不明な部分が多い。

Ⅱ　ヒメタイコウチの生息環境

本種は湿地性昆虫であるが生息場所は限られており、その生息地は以下の３つに要約できる。

・洪積層またはそれより古い地層からなる丘陵と沖積平野との境界線上に存在する湧水
・河川や水路の伏流水の湧き出し場所
・丘陵の中腹部に湧水によって形成される植物が生育する湿地

Ⅲ　ヒメタイコウチの保護管理計画の基本方針

本種の保護管理計画の基本方針を以下に示す４項目とする。また、保護管理の実施にあたっては、生息地の土地所有者及び管理者、関係行政機関、保護活動の主体となる地元有識者などのほか、専門家や地域の生物愛好家との連携を図っていく必要がある。

・生息地の巡視
・生息地の保全
・生息域外保全の維持
・協働・啓発活動

Ⅳ　事業の目標

本種は既知生息地では概ね良好に生息しているが、本種生息地は極めて限られているため、その希少性を考慮すると下記に記述する団体活動の休止等の事態に対処できる体制の構築が重要である。

〇当面の目標

現在、自然保護団体により、自動車道整備工事における代償ミティゲーションとして設置された湿地ビオトープにおける生息地の管理及び同会事務所での生息域外保全が行われているが、この活動を維持するための支援を検討する。

〇中・長期目標

県が主体となり、自然保護団体の活動を引き継ぐことができる人材の育成を図る。これと並行して同会の後継となる保全活動主体の設立も模索する。また現有の湿地ビオトープに加え、保全事業の推進が可能な新たな生息候補地の確保を目指す。なお必要に応じ、資材及び人的資源の支援を継続する。

Ⅴ　事業の区域

奈良県内の本種が生息する地域

Ⅵ　事業の内容

１．生息地の巡視

既知の生息地は、自然保護団体が希少野生動植物保護巡視団体等となって定期的な巡視を実施している。巡視により、今後の動向の把握や予測のために生息環境、個体数等の状況が確認できるとともに、将来的に保全を意図した生息地確保を目指すうえで、候補地を探す役割も期待できる。現在は、同団体による巡視が実施されているが、中・長期目標とあわせて、巡視活動を継続するための具体的な支援を検討する。

２．生息地の保全

〇大きな生息地の保全

生息地は放棄された水田耕作地であることが多く、今後の開発等に対する環境影響評価では本種の生息に注意を促す必要がある。また、本種の生息が確認された場合には十分な保全対策が実施されるような指導が必要である。また、本種の生息場所が維持されている場合でも、生息環境は植生遷移や水条件の変動などによって、常に変化すると考えるべきで、これについては、たとえば草刈り等の人為的干渉を行って、生息環境の維持を行う必要がある。

〇小さな生息地の保全

住宅脇にある耕作地の溝や住宅裏の池堤防付近など、人家周辺の小規模な生息地については、地域住民に対してヒメタイコウチ生息の可能性を伝えることが重要である。このことは、生息地保全への配慮につながるとともに、知られていなかった新しい生息地が確認されることも期待される。

３．生息域外保全の維持

現在、ヒメタイコウチの生息域外保全については自然保護団体に委ねられており、子供たちへの教育活動や啓蒙・普及活動のため、成虫から卵～幼虫を経て、新成虫を発生させる累代飼育が行われている。今後もこれらの保全活動が継続されることを期待するもので

あるが、適切な後継者がいない等の問題がある。県を主体として、後継団体の模索と同時に、現在同団体で行われている生息域外保全の飼育技術を常に活用できる状態に保つため、定期的な記録、整理を行い、生息域外保全を継続するために専門機関への委託等も検討する。

４．協働・啓発活動

現在、自然保護団体は、啓発活動の一環として地元小学生に対して学習会や飼育、放虫の里親制度等を継続して実施しており、奈良県内のヒメタイコウチの啓発活動においては生息域外保全と同様、同会の活動は大きな役割を果たしている。

今後は、橿原昆虫館友の会のような後継となる団体との協働作業を模索し支援していくと同時に、行政機関等との連携において、より効果的な啓発活動の実施を目指す。また、生息地の地域住民に対しては、チラシや回覧でヒメタイコウチの保全に対する啓発活動を行う。

Ⅶ　参考文献

松本 功・中尾 史郎. 2018. ヒメタイコウチの偏在と局在 : その景観-群集生態学アプローチ. 大庭 伸也（編）. 環境 Eco 選書 13 水生半翅類の生物学. 169-184. 北隆館.